



理事長挨拶

長谷川 智子

皆様こんにちは。COVID-19で様々な問題に苦しんでいる皆様に、心よりお見舞い申し上げます。また、最前線で戦っている全ての方々に感謝申し上げます。臨床の現場で戦っている方のお話を聞くと、本当に大変な状況であることがわかります。この世界的緊急事態が一日も早く終息することを切に祈ります。

さて、話は変わり、少々自分のこととお話しさせていただきます。私はここ5～6年、ゴルフにはまっておりまして、家族や友人、職場の方々と楽しむことができました。ただ、下手の横好きで、スコアは一向によくなりませんが、日本海の青い海と空、目の覚めるようなグリーン、の芝や樹木などに囲まれて、おもいきりゴルフクラブを振り回す快感はたまりません。また、ゴルフは心理スポーツなので、何か心にひっかかるものがあると、スコアがてきめんに悪くなります。そのため、不安や心配事などを一切考えないようにする努力が必要なので、心を整える訓練にもなっています。その訓練で心がけているのが、常にポジティブ思考になることです。とんでもない方向にボールが飛んで行ってしまっても、「また失敗、下手な私」とは考えず、「右に行ったから今度の目標は

左だな」「遠くに飛んだということは飛距離、上達した。次は方向設定さえうまくいけば真ん中だな」と考えて、次のホールでは前向きに新たな気持ちでプレーできるようにしています。つまり、悪いことばかりに目を向けるのではなく、常に前向きにゴール設定をし、そのゴールめがけて頑張る精神です。それを続けることで、少しずつですが進歩しているような気がします。

先日、医療情報系の学会に参加してきました。最近の電子カルテシステムや、記録システムなど、多くの新しい情報を得ることができました。特に、地域包括ケアシステムを進める上では、一医療機関内だけで情報共有するのではなく、地域の様々な機関と連携する必要があります。それを可能にするには、思考過程の見直しが必要であることを実感しました。超高齢化社会で、慢性疾患が主流疾病の現代、病気や障害等が完治してから在宅や地域にもどることは難しくなっています。看護過程の展開も、看護上の問題点の解決を目指すことを中心に考えるより、的確にゴール設定をし、そこに向かって何を誰がやっていく必要があるのかという、アウトカム志向に切り替える必要があると強く感じていますし、実際、私はそのような教育を心がけています。

日本看護診断学会は、看護診断だけを検討しているように思われがちですが、看護における思考過程や実践についての研究や教育も対象としています。これからの本学会は、アウトカム志向に関する研究・教育をもっともって皆様に伝えられるよう努力したいと思います。

これからも本学会へのご支援、ご鞭撻、よろしくお願い申し上げます。

第28回日本看護診断学会学術大会 cum the 5th Sigma Asia Region Conference



【大会テーマ】 パーソンセンタードケアに活かす看護実践と用語

Web開催

ライブ配信：2022年7月16日（土）

オンデマンド配信：2022年7月16日（土）～31日（日）

大会長 伊東 美佐江（山口大学大学院医学系研究科）
実行委員長 山勢 博 彰（山口大学大学院医学系研究科）

平素より、日本看護診断学会へのご支援を心から感謝申し上げますとともに、新型コロナウイルス感染症の対策をはじめ、医療、介護、教育、福祉に関わる皆様に敬意を表します。

さて、このたび、第28回日本看護診断学会学術大会を山口県で開催することとなりました。大会長を務めさせていただきます、伊東美佐江と申します。新型コロナウイルス感染症の収束が見通せないなか、皆様の安全と健康

を第一に考え、Web開催としました。2022年7月16日（土）にオンライン開催し、2022年7月16日（土）～31日（日）の期間にオンデマンド配信する予定です。

日本看護診断学会は、1991年に前身の「日本看護診断研究会」が発足し、日本看護診断学会として1995年設立を経て30年を迎えようとしています。看護診断は健康上の課題に単に名前をつけるだけではなく、看護過程そのもの、看護実践のプロセスを示すものとも考えら

れます。今では多くの電子カルテシステムに看護診断をはじめさまざまな看護における標準用語の活用が進められています。

少子超高齢化や医療の高度細分化、多様な健康課題に対するケアシステムを考える際、多職種連携の中心は、やはり患者／クライアント／利用者／住民とそのご家族です。本学術大会では、看護の原点であるパーソンセンタードケアに活かす看護実践、そして看護診断用語をはじめ看護実践用語について、国際的な視点も含めて考える機会としたいと思います。そこで、テーマを「パーソンセンタードケアに活かす看護実践と用語」とさせてい

ただきました。

プログラムには、病院情報システムにおける看護記録、看護に欠かせない臨床推論等、これからの実践に活用できる教育講演やシンポジウム等を企画中です。NANDA International、Association for Common European Nursing Diagnoses, Interventions and Outcomes (ACENDIO) やSigma Theta Tau International Honor Society of NursingにおけるSigma Asia Regionからも看護実践や用語について、情報共有できればと考え、魅力ある学術集会となることを確信しています。皆様のご参加をぜひお待ちしております。

第28回 日本看護診断学会学術大会のプログラムの概略

- 1) 大会長講演 「パーソンセンタードケアに活かす看護実践と用語」 伊東美佐江（山口大学大学院医学系研究科）
- 2) 特別講演 「専門家間の共有意思決定過程（IP-SDM）における医療情報の活用と看護職の役割」 宇都由美子（鹿児島大学病院）
- 3) 理事長特別企画シンポジウム 「電子カルテの看護記録を再考する」 長谷川智子（福井大学）、岡田みずほ（長崎大学病院）、村岡修子（NTT 東日本関東病院）
- 4) 特別企画シンポジウム 「看護実践における臨床推論」 山勢博彰（山口大学大学院医学系研究科）他
- 5) 教育講演 「NANDA International看護診断：開発の現状と今後の展望」 上鶴重美（前NANDA-I理事長、看護ラボラトリー代表）
- 6) 教育講演 「Making nursing visible in Electronic Health Records - Contributions of ACENDIO, the Association for Common European Nursing Diagnoses, Interventions and Outcomes」 Maria Müller Staub (ACENDIO President)
- 7) 教育講演 「看護のための哲学思考」 小川 仁志（山口大学国際総合科学部）
- 8) Sigma Asia Region シンポジウム 田中愛子（山口大学大学院医学系研究科）、Claudia Lai (Honorary Professor, School of Nursing, The Hong Kong Polytechnic University), Janet Wong (The University of Hong Kong), and Sigma Asia Region Nurse Leaders
- 9) 教育研究実践セミナー 「テキストマイニングの魅力“質的データの可視化”」 上野栄一（奈良学園大学） 「看護の思考を育む工夫」 村田節子（第一薬科大学） 「看護の現象を測定する～尺度の活用法」 吉岡さおり（京都府立医科大学） 「質的研究方法としての内容分析」 松本啓子（香川大学） 「根拠ある看護実践～看護ケアの効果の検証」 上原佳子（福井大学）、など。
- 10) その他、交流集会、一般演題などを企画しています。

第27回 日本看護診断学会学術大会を終えて



第27回日本看護診断学会学術大会 大会長 **上野栄一**（奈良学園大学）

新型コロナウイルス感染症の影響下、ご尽力いただいている、医療、介護、教育、福祉の関係者の方々に敬意を表します。

さて、第27回日本看護診断学会学術大会が無事終了したこと感謝申し上げます。思えば、奈良の地で現地開催を最初は企画しておりましたが、安全を第一に考え、ウェブ開催（オンデマンド方式）としました。講演者の方、座長の先生方、多くの方々に支えられた学会でした。ありがとうございました

いました。企画委員一同多くの特色あるプログラムを考え、看護診断学会の未来につなげる役割を果たせたと思っています。理事会、評議員の先生方、多くの関係者の方々のご支援をいただきましたことことに感謝いたします。多くの企画のある中、企画委員一同、動画が無事に視聴されトラブルもなく開催されたことは大変うれしいことです。

大会長講演では、看護現象のとらえ方や暗黙知を形式知に変えることの重要性を述べるとともに、診断名からケアを実践することの重要性について講演させていただきました。看護診断は、一連の看護過程の展開を示すものであり、診断名



をつけることのみで特化したものではありません。重要なことはいかに対象のニーズをとらえ、適切な看護ケアを提供するか、ということ。看護過程の中で重要なことはアセスメントであり、多くの情報の中から患者のケアの最適さを求めるプロセスと考えます。また、今日の医療情勢は、少子高齢化の中、病院・病床機能の分化・強化と連携、在宅医療の充実を目指しています。看護の対象も、患者、家族、地域を考えながら看護提供システムも変化しつつあります。人々の医療に対する意識も変化してきています。そういった意味で新しい看護診断の命名もこれからも進化、発展すると思っています。

本学会の特徴は、多彩なプログラムです。大会長講演、理事

特別講演、特別講演、教育講演、看護診断と介入技術、一般演題などです。看護過程のプロセスに沿うような形をとりました。どのセッションも多くの参加者が視聴されました。演者の先生方、座長の先生方に感謝申し上げます。運営について、特に学会の動画については、動画もスムーズに視聴でき、トラブルもなく参加者の皆様に高画質で提供できたと思います。本学会を支えていただきました関係各位の皆様に感謝いたします。また、参加者の方からは、多くのセッションがあり、「看護診断の本質を学ぶことができた。とても勉強になった。また、画質がよい、音声クリアである。」などの感想をいただきました。特に音声の調整、音量の調整をしていただいたことで、聴きやすいプレゼンテーションとなりました。本学会では、看護診断を取り入れることの意義や看護診断の魅力について奈良から発信できたと思っています。本大会を支えていただきました関係各位、企画委員の皆様にご感謝申し上げます。最後に皆様のご健康とますますのご活躍を祈願いたしましてご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました！

第27回 日本看護診断学会学術大会に参加して

地方独立行政法人 桑名市総合医療センター **伊藤桜 佐藤千純 山路真子 柳川実希**

今回、初めて日本看護診断学会学術大会に参加させていただきました。「看護過程のプロセスとしての看護診断」というメインテーマをもとに、私たちはそれぞれ臨床で行ってきた看護実践について振り返り、発表する機会を得ました。看護実践を振り返る中で、自分たちの行ってきたアセスメントや、看護診断名の選択が正しかったのかを見直す良い機会となりました。看護の経過をその都度評価し、状況に応じて必要な看護診断を立案しながら関わっていくことで、段階に応じた看護介入を行うことができました。臨床現場では、一人の患者に対し、様々な看護師が関り看護を提供しています。その際、ムラのない看護を提供していくためには、看護師の共通認識である看護診断は重要なツールであることを改めて

学ぶことができました。

この学会に参加した大きな成果は、看護診断がその時々の医療現場の状況や変化に応じて見直されていることを再確認できたことです。年々変化する看護診断の内容を正しく理解し用いていくことで、看護の質を上げていけるよう、今後も日々精進していきたいと思っています。



第27回 日本看護診断学会学術大会に参加して



公立小松大学 保健医療学部 **清水由加里**

本大会に参加させていただき、「看護過程のプロセスとしての看護診断」というテーマについて改めて考えました。

現在、私は在宅看護の教員をしています。以前から、「看護診断」において大切なことは、情報収集から対象のニーズを把握し、適切なアセスメントをすることで、患者（療養者）の望む看護につながるとしていました。

先生方の講演を聞き、「あらためて看護の視点で自分たちの看護を見つめなおす」という言葉が印象に残りました。教員となり、在宅看護実習に携わる中で、看護の対象は患者（療養者）だけでなく、患者（療養者）を支え共に生活をしている家族や患者（療養者）・家族を取り巻く人たちも含まれると実感しました。

在宅看護では、患者（療養者）の療養の拠点が病院から自宅に移行し、家族や患者（療養者）・家族を支える人たちが中心となって患者（療養者）と関わることとなります。そのため、家族や周囲の人たちの負担は身体的・精神的にも大きくなります。そして、患者に関わる人たちは、患者とは別のそれぞれのニーズを持っています。このように看護の対象が幅広いからこそ、看護の視点も広く持つことが重要だと思います。そのことで、看護の対象となる全ての人たちのニーズをとらえ、最適な看護ケアを提供できると考えます。

近年、医療の形態は多様化しており、在宅医療のニーズも高まり、在宅医療の充実や連携が求められています。より看護の対象は幅広くなり、変化もすると考えます。今後は看護の視点を広く持つように意識し、自分の看護にも教育にも活用したいと思っています。

国際交流委員会からのお知らせ

国際交流委員会 委員長 伊東 美佐江 (山口大学)

Online 13th Association for Common European Nursing Diagnoses, Interventions and Outcomes (ACENDIO) Conference (2021年3月19-20日) が開催され、次年度にACENDIO eHealth Workshopがthe University of Applied Science, St.Pölten, Austria (2022年4月21日) で開催予定です。また、The 2021 NANDA-I Virtual Conference (2021年6月16-17日) も開催され、2023年にNANDA-I 50th Anniversary Conference 1973-2023が開催される予定です。

日本看護診断学会研究助成のお知らせ

研究助成選考委員会 委員長 滝島 紀子 (川崎市立看護短期大学)

日本看護診断学会には、日本における看護診断を発展させ、看護の質の向上を図ることを目的とした「研究助成制度」があり、50万円を上限として研究費を助成します。申請手続きを行う際は、ホームページの研究助成選考委員会のページに掲載している「研究助成申込書」「研究経費支出計画書」を作成し、日本看護診断学会事務局に送ってください。申請する研究は、看護実践において、普段、取り組んでいる看護診断に関するものであればどんな内容でも結構です。次に、助成を受けた場合のお願いですが、助成を受けた場合は、研究成果を日本看護診断学会学術大会で発表していただくとともに学会誌へ投稿・掲載していただくこととなります。これは、研究成果を他施設にも知っていただき、他施設の看護の質の向上も図っていくという研究成果による社会貢献を目的としています。2022年度の申請締め切りは2022年8月末です。皆様からの研究助成への応募をお待ちしています。詳細は、日本看護診断学会ホームページ<http://jsnd.umin.jp/> (委員会のサイドバーから「研究助成選考委員会」) をご覧ください。

論文を募集しています！

編集委員会 委員長 佐々木 真紀子 (秋田大学)

編集委員会では、看護診断に関する未発表の原著、総説、研究報告、実践報告、事例報告、資料の論文を随時、募集しています。特に、提出期日はありません。投稿された論文は、速やかに2名の査読者に論文査読をお願いし、早期掲載をめざしております。論文の種類については、以下のように取り決めています。

「原 著」：研究論文のうち、独創性が高く、新しい知見が論理的に示され、研究論文として形式が整っているもの

「総 説」：特定のテーマについて、知見を多角的に概観または文献を展望し、総合的に概説したもの

「研究報告」：研究論文のうち、内容・論文形式において原著論文におよばないが、研究としての意義があり、発表の価値が認められるもの

「実践報告」：看護実践・教育の向上、発展に寄与し、発表の価値が認められるもの

「事例報告」：事例を通じて、看護実践・教育の向上、発展に寄与し、発表の価値が認められるもの

「資 料」：看護診断に貢献する資料他

看護実践の貴重な資源となりうる論文の投稿を心よりお待ちしております。

入会のご案内

本学会は適切な看護を行うために看護診断に関する研究・開発・検証・普及並びに会員相互の交流を推進し、同時に看護診断に関する国際的な情報交換や交流を行うことによって看護の進歩向上に貢献することを目的としています。是非、多くの方々のご入会をお待ちいたしております。ご入会に関しましては私共のホームページ (<http://jsnd.umin.jp/>) 入会申し込みよりオンラインにてお申込みくださいますようお願い申し上げます。

入会手続きに関するご不明点は 日本看護診断学会事務局

TEL:03-3352-6223 E-mail:jsnd@convention-access.comまでご連絡お願いいたします。

日本看護診断学会ニュースレター 第24号

発行日 2021年11月1日

編集委員 / 佐々木真紀子、中嶋智子、菊地由紀子、曾田陽子、佐藤美紀

